

【講演】

## あなたにとって旧約聖書とは何か？

榊 原 康 夫

このあいだ、ある集まりで連続講演をしての帰り道、車で送ってくださったかたが、こんなことをおっしゃいました。

「よく、お招きした講師先生は御自分の著書を引いたりして宣伝なさるものですが、先生はちっとも御自分の本のことを宣伝なさいませんね。」

それで今日は、最初から自分の本の宣伝をさせていただけようと思います。このあいだ出版された私の『旧約聖書の生いたちと成立』の二三四ページのところに、私はこう書いておきました。

「……今日の私たちが、正典の書を、どのようにして生かすことができるか、あるいは生かしているか、生かすべきかは、真剣に問われなくてはなりません。はたして日本のキリスト教会や信徒ひとりびとりに、旧約三十九巻が正典として機能してきたか、しているかという反省は、深刻になされる必要があります。」

この春、日本福音主義神学会の総会のときに礼拝説教をしてくださった神戸改革派神学校の安田吉三郎教授も、同じような問題を指摘なさいました。

「……聖書を新しい創造の規準として機能させるということは、決してわかりきった、容易な事ではありません。聖書の靈感を信じておれば、それで聖書が、新しいイスラエルに対する神の権威ある言葉啓示として働くという保証はありません。教会人の肉の思いが、実は聖書を人間的な標語、キャッチ・フレーズ、命題、教理の手引き、道徳的説話などに変えてしまうのです」<sup>①</sup>。

この講演は、このような大きな問題に答えるためのごく小さな一つの試みと考えていただきたいと思います。いたい、旧約聖書は、現実には、あなたにとってどういうものとして機能しているのでしょうか。どのように生かすべきなのでしょう。

### 旧約聖書の律法（法律書）的な用法

原始教会と古代教会において、旧約聖書はきわめて大切なものでしたが、それでも、二つの極端に違った用いた・態度が教会のなかにみられました。その第一のものは、ユダヤ主義キリスト者とか律法主義的キリスト者といわれる異端にみられる態度でした。つまり、旧約聖書をイエス・キリストの福音と同等あるいはそれ以上の規準とみるものです。人は、たといイエス・キリストを信じて、信仰だけでは救われぬ。信仰のうえにさらに、やはりモーセの律法にしたがって割礼も守り安息日も守り、ユダヤ教と同じ行ないもしなくてはならないのです（使徒一五15）。もう一つの正反対の態度がありました。それをグノーシス主義の異端と申します。これはすでに新約聖書の時代に姿をみせ始めますが、もっとも有名なはつきりした形をとったのは、二世紀のマルキオンという人物においてでした。グノーシス主義はギリシヤ的な物心二元論に立っていて、靈魂は悪の原理である物質（肉体）に閉じこめられている

と考えました。彼らによれば、この悪の原理である物質世界を、善なる神が創造するはずがありません。そこで、神の流出・分身というものを考えました。いと聖なる神から神の子が流出し、さらに分身が流出し、そのさきにまた分身が出ていく……そのようにして、だんだんと神性が薄くなり、ついにそのなれのはては、およそ神とは似ても似つかぬものになってしまふというのです。それをデミウルゴス（制作者）と呼びました。旧約聖書の神、物質的天地の創造神といわれていたのは、このデミウルゴスであるのです。しかし、時満ちて、神の長子、もっとも神に近い神の御子が来て、私たちが真のグノーシス（知識）に救いあげて下さり、悪の原理からとき放つて下さるというのです。だから、クリスチャンの神は、旧約の神とは違うのであり、クリスチャンにとって旧約は正典ではない、というのです。

教会は、この二つの極端な異端に反対して、律法からの自由と、旧約聖書の正典性とを主張してきたのです。教会は、いつも、この両極端に警戒しなくてはなりません。

旧約聖書が大きな問題となった次の時代は、宗教改革の時代であります。

まず、マルチン・ルターですが、いろいろな人がいろいろなことを言っているにしても、私はまず最初に、ルターは正典が六十六巻であること、その靈感、無謬性、明白性、十分性を確信していたということを、はっきり確認しておきたいと思えます。これらの点でルターに何か違う態度や考えがあったということ、私は認めることができませぬ<sup>②</sup>。それを確認した上で、しかもルターは正典のリストよりも、正典のなかの「主要な書物」を内容的にふるい分けるといふ態度、キリストとその福音を中心としてみたいという見かたを濃厚にもっていたということも、認めたいと思えます。

「キリストを教えないものは、たとい聖。ペテロ、聖。パウロがそれを教えようとも、使徒的ではない。キリストを教

えるものは、たといユダ、アンナス、ピラト、ヘロデが教えたとしても、使徒的である」。

「私は、エステル書が存在しなかったほうがよいと思う。この書はあまりにユダヤ教的でありすぎるし、その中に異教的邪魔物がおびただしくあるからだ」。

「モーセはわれわれと関係がない。私はユダヤ人ではない。私はモーセを気にする必要がない」。

つまり、コーイマンも言うように、「ルターにとって、聖書はあらゆる部分において平等の権威をもつ律法書では決してなかった」のです。

その点、ジャン・カルヴァンは少し違っていたと思います。カルヴァンにおいては、旧約の選民イスラエルと新約の教会との連続性や同一性がもっと強く主張されました。そのことは、たとえばイエス・キリストの職務論を「預言者」「祭司」「王」の三職論にまとめたのがカルヴァンであったという事実にもよく出ています。この三つは、言うまでもなくきわめて旧約的なものだからです。

ルター派と改革派との微妙な違いは、この時代につくられた信条にも出ているように思えます。私の知るかぎり、聖書の正典の数やリストを明白にあげた近代最初の教会宣言は、ローマ教会のトリエント公会議でした。それが一五四六年四月のことです。そこにいわゆる外典も入れられていたのにはたいして、その後の改革派諸信条は、正典と外典のリストを明示して、正典を告白し始めました。フランス信条（一五五九年）、ベルギー信条（一五六一年）、三九箇条（一五六二年）、第二スイス信条（一五六六年）、アイルランド信条（一六一五年）、ウエストミンスター信仰告白（一六四七年）などです。トリエント公会議より前の、たとえば第一スイス信条（一五三六年）には正典リストの告白はありませんでした。

このような明確な正典の信仰告白は、スイス和協信条（一六七五年）では極端なところまで行きつきました。それは、フランスのソウミュール大学へブル語教授であったルイ・カッペル（一五八五—一六五八年）の新しい批判的研究態度にはげしく反対した、スイスのバーゼル大学へブル語教授ヨハン・ブクストルフ親子の主張をとり入れた、こちの保守的正統派の信条です。ここでは、旧約原文の無謬の保存、母音にいたるまでの無謬の霊感が告白されていましたから、やがてのちには信条としての権威を解かれることになりました。注意したいことは、このブクストルフ親子がユダヤ系の人たちであったことで、彼らは、近代最初のユダヤ人本文学者エリアス・レヴィタに反対して、中世の伝統的ユダヤ教学の立場を主張し続けていたのです。

ルター派の信条は、この点で違っています。トリエント公会議より前のアウグスブルグ信条（一五三一年）に正典リストが告白されていなかったのは、ふしぎではありませんが、その後の和協信条（一五七六年）も、霊感や正典リストや冊数を告白していませんし、外典（的部分）を区別することも述べていません。最近翻訳された『ルターと聖書』のなかで、コーイマンは、「ルーテル教会の信仰告白の文書が、旧約聖書の正典のリストに言及していないことは、注目に価する」と言っています。① どういう意味で「注目に価する」のか、その一つの点を申し上げますと、アメリカのユニオン神学校、コロンビア大学のエミール・G・クレーリング教授は、『宗教改革以降の旧約聖書』という著書のなかで、こう指摘しています、「（和協信条の）この節は、そのきわめて概略的な用語のゆえに、近代のドイツ・スカンジナビアの神学にかなりの利点を与えた。聖書批評の勃興は、改革派諸教会ではずっと大きな困難があった。彼らの信条が、聖書論の問題でもっとはっきりしていたからである」。

さて、ドイツからの新神学の輸入という点を除くと、日本におけるプロテスタント・キリスト教の本流は主としてアメリカ、イギリスから流れてきたということ、この観点からみると大変おもしろい問題もっています。クレーリングは、改革派教会が旧約聖書を重視した理由を、個人の魂の救いだけで満足せず、信者の育成に適した生活環境

すなわちキリスト教的な町や国を造りだすことを重んじたからだ、と説明しています<sup>⑩</sup>。また、「キリスト教世界で、英国ほど旧約聖書があつい歓迎を受け、人々の生活の奥深く浸透したところはない」、とりわけ分離派の中でそうだった、と言っています。彼らのクリスチャン・ネームにとくに旧約の人名が愛用されたのだそうです。そうして、イギリスの清教徒、長老派、分離派など、要するに国教に反対した人々は、国王や国の祭司を弾劾する旧約聖書を彼らの戦いの武器としたのでした<sup>⑪</sup>。

アメリカに渡った清教徒的キリスト教が、同じように旧約を愛用したことは、言うまでもありません。彼らはイギリス以来の伝統のほかにも、新しい町と国を造り開拓する上に旧約を必要としました。二〇世紀になると、資本主義社会の弊害にたいして、旧約預言者から社会的福音をとくということも、盛んになりました。

これらの英米宣教師からの圧倒的感化のもとで形成された日本のキリスト教会が、よく言えば長老派伝統の、悪く言えばユダヤ教的な旧約聖書観をもっている事実は、いなむことができないと思います。私たちは、文句なく、聖書は六十六巻、と入信したときから頭ごなしに教えこまれ信じこんでいます。教会で旧約は説教されず、自分の信仰生活でも旧約はわからずじまいに封じられています。それでも旧約三十九巻は信仰と生活の規準、と告白しています。そうしてその信仰は、コイマンのいう「あらゆる部分において平等の権威をもつ律法書」のように扱おう傾向が強もっています。教会で旧約聖書が説教され用いられるのは、どうい場合でしょうか。それはほとんど、十分の一献金のすすめ、安息日厳守のいましめ、異教徒・不信者との結婚を禁ずる説教、十戒をそらんじさせて修身道徳教育をするためではないでしょうか。つまりは、ユダヤ主義的、律法主義的な、旧約をクリスチャンの六法全書のように読む態度ではないでしょうか。

## 旧約聖書の科学（教科書）的な用法

古代教会の旧約聖書にたいする間違った態度の第一は、ユダヤ教におけると同じように旧約聖書を平板な法律書としてもつことでありました。第二の間違ひは、科学的哲学的前提に立って旧約聖書を批判し否定してしまったマルキオンの態度であります。このような旧約批判または否定が近代の教会で姿を現したのは、教理学の畑ではシュライエルマツハーやハルナックであり、聖書学の畑ではヴェルハウゼン学派であった、とみてよいと思います。私たちは、このような形を変えたマルキオン主義に反対しなければなりません。

しかし、私はここでは、このことと関連して別の面から考えなおしたいと思います。グラーフ・キューネン・ヴェルハウゼン学説の最初の提唱者は、ストラスブルグ大学ロイス教授であります。ロイスは一八四三年の夏ごろから新学説を講義し始めていたようですが、その下で学び新学説に煩悶していた弟子のグラーフに、手紙を送って信仰の動揺を救おうと心を砕きました。一八三七年ごろロイスはこうさとしていたのです。『自分自身は決してグラーフのいう意味の信仰をすててはいないこと、そしてその基礎となるべきものとして、カント哲学によって味わわれた一種の神学を説明し、合わせて字義通りの正統主義というものは、頭腦の弱い人間しかもちつづけるものではない、という意味のこと』を答えているのです。当時、正統主義は、頭の弱い人しかもち続けうるものでない、と考えられていたようです。

今日、事態はまったく逆になっています。字義通りの正統主義に立って、旧約聖書から天地創造や人類太古の歴史を信じ、一般学校教育で教えられる科学的進化論的な自然や歴史のみかたに弁証して行くということは、よほど頭の

強い人間でなければできなくなっています。私の上の娘は中学生になりましたが、もうこの問題はひしひしと身近に迫まっています。夜、こともべやで妹と寝ながら、ひそかにこのことを話し合っているのが聞こえます。「日曜学校ではね、一日目に光、二日目に大空ができたって習ったでしょ。でもね、どうも違うらしいよ」。「ふーん、そんならどうなったんの」。彼女は早くも聖書批評学を妹に伝道しつつあります。私は間に割ってはいって、もう一度創世記を読みなおさせ、小学生のころ習った幼い聖書解釈を、中学生向きのおとなの解釈に高めてやらねばなりませんでした。しかし、おもしろいことに、そういう子でさえも、福音書にあるイエスの復活や昇天などの奇跡は、文句なく信じていることができるというのです。「イエスさまだからあたりまえ」というのが理由です。

私が注意したいと思うことは、この区別です。イエスさまなら復活しようが昇天しようがふしぎはないが、そのことと、天地が六日間できたとか全世界が水におおわれたとかを信じていることとは違うという、中学生にもわかる区別です。このあとの方を今日も信じ続けるのは、相当頭の強い、心も強い人でなければもちこたえられないことになっています。クレーリングはこう警告しています。

「次のことを忘れてはならない。科学的な思考がどんな点でも聖書の教理を危地にさらした場合、助けを求めて後者をいち早く呼び出してきたというところ。とりわけ、ほとんどあらゆる領域で知識の進歩をはばんできたのは、旧約聖書の権威への固執であった」<sup>⑩</sup>。

保守的な教会は、旧約聖書のある特定の科学的哲学的自然像・歴史像に固執することによって、頭の強くない人々から旧約聖書を捨てさせ使えないように奪い去る危険を、十分に注意しなければなりません。確かに、ほとんどあらゆる領域で知識の進歩をはばみ、人々をつまづかせたものは、新約聖書ではなくて旧約聖書の字義通りの権威への固執でありました。人々は、十字架の愚かにつまづく前に、六日の創造、もの言う蛇、全世界をのみつくす洪水の愚かにつまづいているのです。

これと関連して、私は聖書の破壊的批評学と保守派が酷評してきた近代聖書学について、一つ二つの弁護をしておきたいと思います。

ヴェルハウゼンは、代表作『古代イスラエル史序説(プロレゴメナ)』の序言のなかで、「個人的体験」を引いています。

「私の初期の学生時代、私はサウルとダビデ、アハブとエリヤの物語などに魅せられた。アモスとイザヤの説話を私を強くとらえ、私は結構、旧約の預言書や歴史書に自分を読みこんで読んだ。私に与えられていたこうした助けのおかげで、私はこれらを相当に理解したと思えるが、同時に、私はまるで土台からでなく屋根から始めるような良心の苛責に悩まされていた。私は律法を完全に熟知しておらず、その律法については旧約全文献の基礎であり前提であると教えならされてきたからである。……反対に、歴史書や預言書の私の鑑賞は、律法によって損なわれた。律法はそれらを一向に私に近づけず、かえって、声はすれども姿は見えず実際の効果は何もない幽霊のように、律法はぎこちなく割りこんできた。律法とそれらの間に接点がある場合でも、律法の先行性に味方しては公正な判断を下すことができないと思った。……ついに、一八六七年の夏、ふとゲッチンゲンを訪れたとき、リチュルを通して、カール・ハインリッヒ・グラフが律法を預言者より後に置いたことを知った。この仮説の彼なりの理由などほとんど知りもしないで、私は喜んでそれを受け入れた。律法書ぬきでヘブル民族の古代を理解できるという可能性を、私はたやすく自分に納得できた」<sup>⑪</sup>。

彼はこの革命的仮説をとったために、みずからグライスヴァルト大学旧約学教授の椅子を捨てたのでした(一八八二年)。明らかに、ヴェルハウゼンは、特別な偏見や不信仰から聖書批評学をとったわけではありません。むしろ、彼

が五書批評学をとったのは、良心からであり、その良心のゆえに大学をも去ったのです。私たちは、旧約聖書批評が不信仰や悪意から生まれた、と誤解すべきではありません。

もう一つ、聖書批評学において大事な働きをしたものに、事実をたいする良識ある判断、健全なコモン・センスがあります。

五書批評学はドイツのヴェルハウゼン学派で完成したと普通に考えられています。私は、ドイツに並んで重要な貢献をした国にイギリスがあった、と考えております。トマス・ホップス『レヴァイアサン』（一六五一年）、アレグザンダー・ゲッデス『ヘブル語聖書の批判的注と新翻訳』（一八〇〇年）、コレンツ『批判的に検討した五書とヨシユア記』（一八六二―七九年）、ウィリアム・ロバートソン・スミス『ユダヤ教会の旧約聖書』（一八八一年）、サムエル・ロールズ・ドライヴァー『旧約文献緒論』（一八九一年）など、五書批評学史上の重要な仕事がいギリスから生まれました。

クレーリングから学んだようにイギリスで旧約聖書がひじょうに尊重された事実と、この現象とは、どう関係し、説明されるのでしょうか。一見矛盾するようにみえますが、イギリスにはいくつかの点で聖書批評学を促す因子があったと思われます。一つは、ホメーロスの研究やシエクスピアの研究など、古典文学の批評的研究がなされてきた背景があることです。二つには、大英博物館に象徴されるような、事実と資料とを重んずるイギリス人の実証主義的自然科学的な思考法があります。チャールズ・ライアー『地質学原理』（一八三〇―三年）、チャールズ・ダーウィン『種の起源』（一八五九年）などの自然科学と、フランスと共にイギリスが先頭切って開拓してきたアッシリヤ学・聖書考古学があります。ヘンリー・ローリンソンは一八四七年にベヒストン碑文解読に成功し、ジョージ・アダム・スミスは一八七六年に『カルデアの創世記』を出しました。三つには、これと並んでイギリスの海外伝道がありま

す。海外伝道において、既成教会の正統信仰にとられない新しい聖書の光が発見されました。アフリカのナタルの主教になったコレンツは、聖書のズル語訳作成のために、土民と出エジプト記を読み合わせていました。「もし人がつえをもって、自分の男奴隷または女奴隷を撃ち、その手の下に死ぬならば、必ず罰せられなければならない。しかし、彼がもし一日か、ふつか生き延びるならば、その人は罰せられない。奴隷は彼の財産だからである」(出エジプト二二―二一)。土民の一人がコレンツに、「神さまは、ほんとうにこう言われたのですか」と質問しました。コレンツは、これを蛇のささやき(創世三)とは受けとりませんでした。かえって、従来の聖書観では聖書全体について神に責任をおわせることになる、と気付いたのでした。

このように、私たちは、聖書批評学における良心的な態度と、事実を率直正直であるとする健全なコモン・センスとを、正しく評価しなければなりません。

このような話のある集会でいたしましたら、閉会の祈禱をしたある牧師が、//動機がいかにも良くても結果において破壊的で危険な批判的聖書学から守りたまえ//と祈られたことがあります。また、ある集会で、『新改訳聖書』についての話し合いをしましたとき、ある牧師は、//結果のよしあしはわかりませんが、原訳者がみな逐語靈感を信じておられるというので採用しています//とおっしゃいました。

私は、このような態度は卑怯であると思います。ひとのしたことは、動機と目的がよくても結果が悪いからといって取り上げず、自分たちのしたことは、結果のよしあしは棚上げにして動機が正しいからよいとする——このような態度は、知的に正直ではありません。信仰的にも聖書的ではありません。私たちは、信仰的動機が正しく良心的であれば、結果に不満不足があっても、その熱心を評価し、その人と奉仕とを愛をもって受け入れるべきではないのでしょうか。

ルターの食卓仲間が、多くの人の判断では五書はモーセによって書かれなかったのだ、と発言したとき、ルターは「構わないじゃないか」と答えました<sup>②</sup>。ヒステリックにならないで、冷静に、自然と歴史における事実に健康な態度でぞむべきであります。聖書批評学によって明るみに出された正しい研究成果には学び、何が何でも字義通りに解釈するという姿勢を改めるべきであります。そうすることによって、旧約聖書を六法全書のように用いることから、科学の教科書のように用いることから、守られるでしょう。

## 旧約聖書の説教

旧約聖書のユダヤ主義的律法主義的用法も、グノーシス主義的哲学的批評と、その裏がえしである科学の教科書的な用法も回避して、正しく位置づけるには、どうすればよいのでしょうか。私は、それはキリスト教会が旧約聖書を説教すること、説教においてそこから神のみことばを聞きとっていくことをおいてほかにない、と信じております。

私事を申しあげて恐縮ですが、私が旧約聖書を勉強しようと考えたのは、信仰にはいったのと同時でした。それは、私の牧師が、神学校で旧約学の先生をしていたという話を聞いたからです。実際には、病臥中の先生から旧約の説教を聞いたことは一度もなかったにもかかわらず、先生が旧約の先生だということだけで、自分も旧約を読もうと思いました。私は、教会で、牧師が旧約聖書を形式でなくほんとうに聖書としてもっているだけで、信徒たちに大きな感化を及ぼす、と信じます。

牧師が病気でしたから、私は求道中、半分はW・A・マキルエン博士のヘブル書連続講解説教で養われ、モーセ律法の説明で入信に導かれたようなものでした。それで私は、旧約聖書の説教によっても人はキリスト教信仰にはいることができる、と確信しております。

事実、キリストの福音は、旧約聖書の説教によって伝道されました。ルターは、「旧約聖書のみが新約聖書と対照して聖典と呼ばれ、新約聖書は肉声でなまのことばであり、文書ではない」ので、聖書講解説教とは元来、旧約聖書説教のことだ、としたほどです。イエスは、「あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この(旧約)聖書は、わたしについてあかしをするものである」と言われました(ヨハネ5:39)。ですから、「もし、あなたがたがモーセを信じたならば、わたしをも信じたであろう」と断言なさることができたのです(46)。パウロは、テサロニケ伝道るとき、「例によって、その会堂には行って行って、三つの安息日にわたり、(旧約)聖書に基いて彼らと論じ、キリストは必ず苦難を受け、そして死人の中からよみがえるべきこと、また『わたしがあなたがたに伝えているこのイエスこそは、キリストである』とのことを、説明もし論証もした」のです(使徒一七:2-3)。教会は、旧約聖書が「キリスト・イエスに対する信仰によって救に至る知恵を、あなたに与えうる書物であることを知っている」はずであります(第二テモテ三:15)。

今日、私の接するかぎり、多くの教会は旧約聖書を説教していません。いろいろな教派の教師研修会や牧師会にお招きをいただいて、旧約説教の重要性を力説するのですが、しかし、旧約を使ったことがない、旧約は使いものにならない、いえ、使っていないなくても痛痒を感じない、とおっしゃるかたが多くおられます。確かに、旧約の説教には大きな困難があります。しかし、教会が旧約において神のことばを聞くことから始めないかぎり、困難をとり除くどんな作業も生み出されはしないでしょう。

日本の旧約学を一瞥すると、進歩的批評的な学者たちの労作が、詩篇、箴言、ヨブ記など、信仰の主観面をあつか

った知恵文学に集中してきたことに気付きます。旧約の歴史書から説教できてきたのは、内村鑑三<sup>⑨</sup>、山室軍平、笹尾鉄三郎のような保守的な聖書信仰者ばかりであったといえます。ほんとうに、旧約三十九巻の全体を用いて神のみことばに聞くことができるのは、聖書の無謬の靈感と權威とを信じている教会だけであります。ですから、もし神が旧約を正典として用いたまい、旧約の説教において私たちに語り出したもうとしたら、それは私たちの教会からであります。私たちは、旧約の全体を説教できる特権と義務とを忠実に果たしていきたいものであります。

あなたにとって、旧約聖書は、いったい何であるのでしょうか？  
(一九七一年一月二五日夜、日本福音主義神学会公開講演会にて)

## 注

- ① 日本福音主義神学会編『福音主義神学』二号六四一―六五二ページ(このことば社、一九七一年)。
- ② J.T. Müller: *Luther and the Bible, in Inspiration and Interpretation*, ed. by Watwood, Erdmanns, 1957, pp. 87-114.
- ③ 『聖ヤコブと聖ユダの書簡への序文』。
- ④ 『卓上語録』一・一九二二。
- ⑤ 『モーセ第二書の説教』。
- ⑥ 『ルターと聖書』三三〇ページ(聖文舎、一九七一年)。
- ⑦ 邦訳は拙著『旧約聖書の写本と翻訳』二六一―三三三ページ参照(いのちのことば社、一九七二年)。
- ⑧ 中世ユダヤ教会では母音記号をモーセ起源またはエズラ起源となす者が多く、カライ派ハダッシ(一一〇〇年ごろ)は、神は母音記号なしには律法を創造されなかったときえ言った。母音記号をマンレテ・テベリヤ学派に負うと言ったのはイブン・エズラ(一二世紀)とレヴィイタであった。
- ⑨ 前掲書三四九ページ。

- ⑩ Emil G. Kraepling: *The Old Testament Since the Reformation*, 1955, Schocken, p. 38.
- ⑪ E.G. Kraepling: *op. cit.*, p. 21.
- ⑫ E.G. Kraepling: *op. cit.*, p. 41.
- ⑬ 中央神学校教授であったG・K・チャップマン(一九二八―四一年在職)は、戦時下の国家神道の強要について、「たしかにキリスト教徒の間に混乱をおこしたおもしろい理由の一つは、教会はもろろんキリスト教主義学校においても、旧約聖書の知識を明らかに欠いていたことでありました。旧約聖書には偶像崇拜の性質とそれからくる不幸な結果が明瞭に描写されています。またこの大きな悪に信徒が妥協しますと、神はただちに審判をもって信徒にのぞみたもうことが明らかにされています」と指摘している。『中央神学校の回想』一〇四ページ(聖燈社、一九七一年)。
- ⑭ 一〇―一二世紀に小アジアにおこったホモシイル派(カタリ派)は、詩篇と預言以外の旧約を廃棄した。宗教改革期のアナバプテスト派も旧約はユダヤ人の正典であるとして拒絶した。
- ⑮ 「キリスト教がユダヤ教と異教とに対する関係は同一である。このどちらからキリスト教に移るにも、別の宗教へ移ることになるからだ」(『キリスト教信仰』一一)として、「旧約は、新約の規制的權威と靈感とを共有しなぐ」(一二)ので、新約附録として編集すべし、と主張した。
- ⑯ 「二世紀に旧約を投げ出すことは、教会が正しくも拒否した誤りであった。十六世紀に旧約を保存するのは、宗教改革がまだ避けるべきでなかった運命であった。しかし十九世紀も後にまた旧約をプロテスタント内で正典中に保有するのは、宗教的教会的麻痺の結果である」(『マルキオン』)と断定し、旧約を外典に移すべし、と主張した。『基督教の本質』第一〇講(岩波文庫、一八七―八ページ)参照。
- ⑰ ヴェルハウゼン学説に十八世紀ヘーゲル合理主義と十九世紀進化論がファトケーを経て強く介入し、純文献批評にとどまっていなかったことは、ペーデルセン(一九三一年)が指摘し、同学説放棄の理由とされた。  
なお、キリスト教会の旧約聖書に対する関係は、ファン・ルーラーによれば一〇種にも分類されており、J・ブライトによれば三種に分類されていて、ヴェルハウゼンは、マルキオンIIシユライエルマツハーIIハルナツクの旧約全廢型と違ふ旧約取捨撰択型(リベラリズム)に入れられている。  
A.A. van Ruler: *The Christian Church and the Old Testament* (E.T.), 1971, Erdmanns, pp. 11-14.



J. Bright: *The Authority of the Old Testament*, 1967, SCM, p. 97.

⑱ 渡辺善太『聖書の説教とは』一二四ページ（日本基督教団出版局、一九六八年）。

⑲ E.G. Kraaling: *op. cit.*, p. 42. クレーリングは「J.J.V. ホワイト『科学と宗教との闘争』（岩波新書に邦訳あり）を参照せよ」。

⑳ ガリレオはすでに、「聖書には誤りがありえぬとしても、聖書の注解者や説明者のうちにはときにはいろいろな誤りを犯すものもあるかもしれません。そのうちでもっとも重大でよく起こる誤りは、つねにことばの文字通りの意味に固執しようとする場合で、こういふときにはさまざまな矛盾だけではなく、重大な異端や冒瀆さえ生じかねないからです」と警告した（一六一三年一月二一日付カステリ宛書簡）、青木靖三『ガリレオ・ガリレイ』七七ページ（岩波新書、一九六五年）。

㉑ J. Wellhausen: *Prolegomena to the History of Ancient Israel* (E.T.), 1957, Meridian Book, pp. 3-4.

㉒ さらに七世紀末の聖カタリナ修道院長アナスタシオスは、教会を去る人々が挙げた疑問に「モーセが創世記の著者か、創世記には諸種の矛盾があるではないか、という質問があったことを述べた。E・ヤング『旧約聖書緒論』一六六ページ（聖書図書刊行会、一九五六年）。近代五書批評の祖ジャン・アストリュクの意図は、このような疑問に対して、五書のモーセ編集性を弁証しようとする護教的意図であった。

㉓ 『卓上語録』三・二八四四。なお、『福音主義神学』二号三三—三六ページのクラス・ルニア「神の言としての聖書」、『聖書信仰』誌一九六八年一月号巻頭の拙論「聖書信仰とキリスト信仰」参照。

㉔ コーイマン前掲書二九六、三〇四ページ。

㉕ 明治四二年『モーセの五書』において、「今の信者は、ことに日本の基督教信者は旧約聖書を読むことが至って少ない。彼らにとりては、聖書と言えば新約聖書のことである。彼らは旧約のときは彼らの信仰に何の関係もない者であるかのように思っている。しかしながら、これ大なる誤謬である。聖書は旧約と新約とより成る者であって、その一つを欠いて聖書は完全な者でない」と言った。『中央神学校の回想』において前記チャップマンは、就任当時のアジアと日本の教会の旧約への無関心を描いている（一〇三—一〇四ページ）。

（理事長、日本基督教改革派教会常任書記長、東京恩寵教会牧師、日本基督神学校講師）